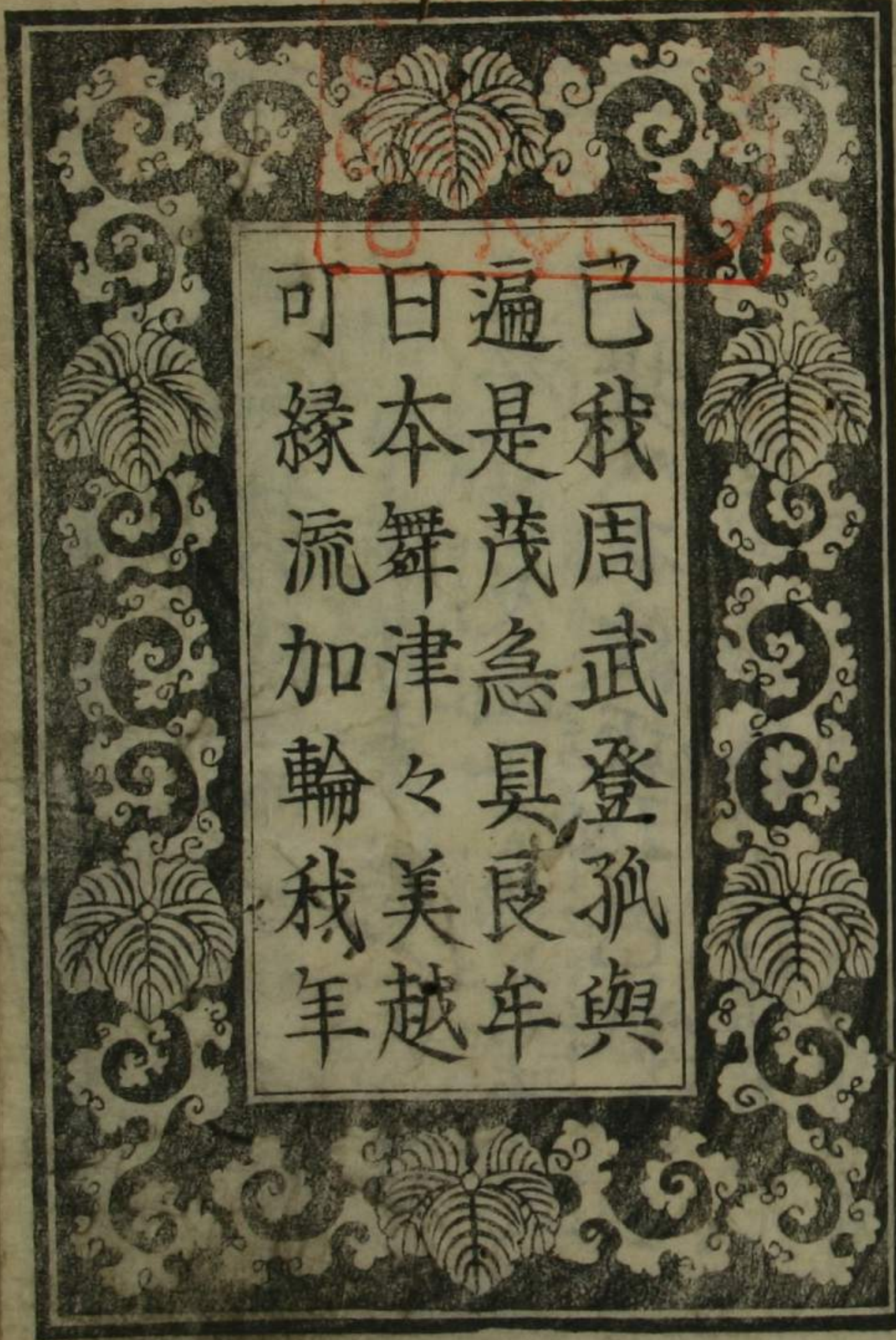




百八色唐紙
468
/

13
468
1





已我周武登孤與
 遍是茂急具良牟
 日本舞津々美越
 可緣流加輪我牟

明心 18
 瑞 468
 卷 1

一八

自叙
 起承轉合の續篇を色唐紙
 空の何れ哉春未始と先梅小
 来て鶯子友喚子鳥打連之
 日本堤や衣紋坂五色粧ふ全
 盛乃五街を曲輪み通来て

爰に伏間の神を召し召す
 蕩子とて喚わす太む色
 然色と賢よ換よ寔乃唐子
 此本文を轉言あら表題を
 号し通者ハ雷名乃彼れ十
 返舎大人るに其まの跡小



夜をくぐり乃

世をなげきて

火彩

まわりのそらみ

色づきし春れ

小粒舎

三楯

毫をの鳥の啼 吾妻女郎と
 標客に張や意氣地の州稿
 由天窓と慙を書のめく愚作者
 顔觸小序をぬ夏秋叙進と云
 戊子 寛江舎葛丸述 賈



川新内
あつまひ
みり
れ
女
わ
い
客
志
東源亭
忠先



此君の情毛
 う我なり
 河
 や
 牛乳
 杯
 心傷
 一羽さうり母て
 東紅亭
 清子



かたしるぬきりの
 なつとぬきりふさり
 蘭あけり
 せうとぬきり
 除
 ちる
 ちる
 ちる
 壺輪樓
 高木

小世帯成を死て取扱ひ先達の極子が其奥に
 若れざるを死と皆々の半ひりて唐松の幾くお由東
 夫。送成付しと意て不海なるの如く大怪しき
 其うおの言決りしと号も後乃江を定為す其
 物成のいんが産産くはるゆは道きとの答て
 かく流る若界の決り別あので流りし馴ら
 のれゆめあましくなつちあつち取扱入る
 由夢は事成海しぬ

○第二回

されが色の乃の別あのでゆくをま中に浮名の上
 のひんかもの知らねの表向の思ひ切ても肉を其
 いあく流る身ので。仁三身と唐松の一旦其に
 だち掃ふは其と。更にはなれぬの命のそのまじ
 仁三身の上子者も後名おのうくあやまるに
 初めれば物で男やごの月勝く更に圓入れば
 仁三身の手持るく十言と平幕おせ死立られ

に。其身を傳つた合あらうもの入いる。遂ついににその體たをたたむ。
おとろは賢けんの確論かくろんありけり

起承轉合後篇卷之壹終

